**平成２９年度　第３回大阪府障がい者自立支援協議会**

**高次脳機能障がい相談支援体制連携調整部会**

**高次脳機能障がい支援体制整備検討ワーキンググループ**

と　き　　平成３０年３月２日（金）１４時から１６時まで

ところ　　大阪府立障がい者自立センター１階　大会議室

○事務局　それでは、定刻になりましたので、ただいまから平成２９年度第３回大阪府障がい者自立支援協議会高次脳機能障がい相談支援体制連携調整部会高次脳機能障がい支援体制整備検討ワーキンググループを開催させていただきます。

まず初めに本日の出席者の皆様のご紹介についてですが、時間の都合上配布しております資料の配席図をもって代えさせていただきたく思いますので、ご了承ください。

それでは、議事に移ります前にお手元の資料の確認をお願いいたします。お手元の配布資料としまして、一番上から配席図、本日の次第、委員名簿、ワーキンググループの運営要綱、資料１としまして前回までのワーキンググループとヒアリングを受けて修正した主な内容について。資料２としまして「Ｈｏｗ Ｔｏ集構成案」の「地域で高次脳機能障がい者を支えるヒント集」と書かせていただいているホッチキス止めのものとなります。不足のもの等はございませんでしょうか。

なお、本協議会につきましては、会議の趣旨を踏まえまして、会議の公開に関する指針の趣旨に基づき、公開で実施をすることとしております。今のところ傍聴の方はいらっしゃらないですけれども、もし傍聴の方がいらっしゃった場合は個人のプライバシーに関する内容につきまして、ご議論いただく場合は一部非公開ということで傍聴の方にご退席を頂くことになりますので、プライバシーに関わるご発言をされる場合は事前に事務局までお申し出ください。

それでは、早速ですが議題に移りたいと思います。ここからの進行は増田ワーキンググループ（ＷＧ）長にお願いいたします。

○増田ＷＧ長　よろしくお願いいたします。一番遅くに来て申し訳ございませんでした。恐らく皆様方年度末を迎え、お忙しく~~て~~業務をされているかと思います。

では、早速ですけれども、前回のワーキングとヒアリングを受けて修正しました議題に基づきます高次脳機能障がい者を支えるヒント集について事務局から説明を頂きたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

○事務局　それでは、資料１と資料２と行ったり来たりしていただく形になると思うのですけれど、ワーキングとヒアリングを受けて修正した内容のご説明をしたいと思います。

まず、名称なのですけれども、最初にこのワーキングが始まったときには「市町村において高次脳機能障がいの個別事例検討を促進するための『Ｈｏｗ Ｔｏ集』」というふうなことで作りたいということで始まったのですけれども、内容を作っていくうちになかなか読み手の方にどんな内容かが分かりにくいのではないかということで、こちら~~当初~~の案としては「地域で高次脳機能障がい者を支えるヒント集～支援会議や市町村地域自立支援協議会等を活用して～」という形で変更しました。

全体の構成なのですけれども、読んで分かりやすい内容のほうが良いなということで、全体の構成を１章は支援にあたり必要な視点と地域づくり、２章で支援会議について、３章で事例発表、事例検討型研修について、４章で各市町村内における取組の紹介~~、~~～窓口対応の工夫と社会資源活用の工夫～、５章で高次脳機能障がいの理解を深めるための取組の紹介という形に変えました。｢はじめに｣で作成の意図を、｢おわりに｣で各市町村地域でこれをヒントにして知恵を絞って色々と作り上げてくださいねということをお伝えしたい内容を明記しました。

続いて個別事例検討という言葉がそれぞれ聞かれる方にとって色々と思い浮かべるところがあって、支援会議のことをイメージされる方もいらっしゃいますし、事例検討型研修をイメージされる方も居られたのかなということで、支援会議と事例検討型研修と分けて定義もこういうふうなことで書いていますという説明も記載しました。

第２章ですけれども、支援会議の実際ということで前回のワーキングで色々な意見が、実際、事例に即したものがあると良いなというようなお話しがあったかと思うのですけれども、一つのケースで書くほうが分かりやすいと考えたので、一つのケースを時系列に沿って記載しました。個人情報の取り扱いについても支援会議の際に必ずご議論になってくると思われますので、個人情報の取り扱いの留意点について記載しました。

第３章は事例発表、事例検討型研修についてということで、前回のワーキングではほとんど情報がなかったのですけれども、~~各~~府内の各圏域でしていただいた事例検討の具体的な取組例を記載したのと、あと、事例検討型研修をする意義や工夫例を記載しました。２３ページから高次脳機能障がい当事者家族の思いということで、ここは絶対外せないなと思っていたのですけれども、前回までご紹介した方々に加えてもう一人ご家族の思いを追記しました。前回のワーキングのほうで当事者会、家族会が、ご本人、ご家族にとってすごく思いを共有できる~~から~~場だということを伝えたときに、支援者が「結局、本人同士にしか分からないのかな」と思ってしまわないようにということで、コラムの一番最後に支援者のつぶやきとして記載しました。

第３章と「おわりに」、資料編のところで少し追記をしているのですけれども、２章、３章の取組から４章、５章の取組につなげるためのツールとして地域課題分析シート（３９ページ）、｢おわりに｣のところにそういう地域課題分析シートを活用して行った研修会の紹介と、あと資料編のほうに実際に使った様式も載せています。

あと、ある市の社会福祉協議会における職員のスキルアップのために事例検討会をされたというお話もお聞きしたので、２２ページのほうにそれも紹介しています。

資料編のところなのですけれども、前回のワーキングで国リハ（国立障害者リハビリテーションセンター）のフロー図みたいな形で発症からの流れ図があるほうが分かりやすいというお話がありましたので、４１ページ、４２ページにそれも入れました。１枚では文字が見えにくくなるので、４２ページのほうで文字による説明を、と分けて記載しています。それから、支援の流れだったりとか支援機関が移っていくということも実際の事例で知りたいというようなご意見もあったかと思うのですけれども、それを使たらええで帳に４つ事例が載っていたので、それを抜粋という形で、使たらええで帳の活用例として挙げている４つの事例なのですけれども、発症から現在に至るまでの経過や関わっている機関が分かりやすいかなということで抜粋して掲載しています。ページは４８ページからになります。

○事務局　少し補足説明をさせていただきます。大きな構成の中で２章と３章ですけれども、支援会議というのがいわゆる個別計画を立てるための個別支援会議であるとか、各市町村、基幹（相談センター）なりが支援者同士が集まって検討したほうが良いなと思われるような支援会議とか、たぶん支援会議という言葉だけを使うと色々な場面があるので、冒頭の３ページの一番下の囲いのところですが、支援会議というのは市町村等が主催し、あるケースに関係する支援者、ご本人やご家族が集まり、課題等を整理・検討したり、それぞれが持つ情報を共有したりすることで今後の支援の方向性を決める会議、ここではいわゆる市町村等が集まって会議したほうがいいよねといわれて行われるケース会議のことを支援会議と呼ぶというふうに、一番冒頭のところでこのヒント集における支援会議はそうだよ、というふうに入れました。

前回、いわゆる会議の進め方ということで、市町村のほうからもいろいろ担当者が変わるといったときにこういうようなやり方でやるのがあっても良いなというご意見を頂いたので、支援会議の進め方については先ほども説明を申し上げたように、会議のプロセス、進行の流れに沿って一つの事例をとらまえて、終結に至るまでどういう形で会議を行って、それぞれが課題を共有し、次回までにそれぞれの役割分担をこういうふうにしようと決めて議論を進めていったかという経過が分かるような形で、３回の支援会議の実際を載せたのと、事例検討型研修は第３章のほうで各圏域で今年度ネットワークのほうでやっていただいた事例検討型研修の実際を載せるという形にしていて、２章、３章はそれぞれやった実際なり、こういうふうにやってはどうでしょうかというようなモデル会議のようなものを載せました。当事者、家族の思いのコラムのあと、第４章、第５章は、それぞれの市町村で行われている取組を紹介しているわけですけれども、３９ページの終わりのところに４章、５章で掲載した市町村の取組とか地域資源の活用例がそもそも２章、３章で触れている事例検討型研修であったり、支援会議で浮かび上がってきた地域での困り事、地域課題ですね。そういった課題に対して今、私たちの地域にある社会資源や支援機関等の機能を組み合わせて解決できないかというようなことで考えた連携とか、支援者のちょっとしたひらめきから始まったものなので、４章、５章の取組例もそういったヒントとして使ってもらって、自分たちの地域ではそのヒントの中からその要素をとらまえていって、どういうふうにしたら自分たちの地域でそういったヒントを形にできるだろうかを考えていただきたいということで、「おわりに」を入れています。

では、どういうふうにしたらできるかという参考のために地域課題分析シート（資料編の４５ページ）をご覧頂いて、地域課題分析シートで、記載例を少し挙げているのですけれども、少し前後するのですけれど、使い方を「おわりに」のところに載せているのですけれども、まず地域課題分析シートは５ピクチャーズを元に地域の課題について検討するシートですということで、使い方としては、まず今回は社会資源について考えましょうと、地域課題分析シートを使いましょうということで、まず使うのは一番下の地域のストレングスをみんなで出し合ってもらえますかということで、ここが結構大事で、今、自分たちの地域の強みは何かを色々挙げてもらうと。

地域のストレングスを挙げてもらった後に、次に考えるのは将来像、あるべき姿｢こうなったら良いな、こうなってほしいな｣というのを話し合ってもらいます。まずは将来像の｢こうなったら良いな｣という理想像を話し合います。そういった将来像について次に考えるのが今の現状と自分たちの地域課題なのですけれども、では、こうなったら良いなという将来像があるのだけれども、自分たちの地域の今の現状はどうか。それから見えてくる地域課題はどうかをみんなで話し合ってもらって、そういった今の現状、地域課題に対して解決のためのアクションをすでに試したことはないかなと。まだ試していないアイデアはないかなという形で考えてもらって、何があればこの将来像に近付けるかというようなことを解決のためのアクションとして考えてもらうことで、ここに載せている様々なヒント集の事柄を参考に自分たちの地域でどういうふうに活用したら良いかというようなことを地域課題分析シートみたいなツールも使って考えてほしいという形で今回大きく構成を変えて、最後、ヒントをヒントとして使うためにというような使い方について書かせていただいたという形になっています。

○増田ＷＧ長　ありがとうございました。では、ただいまのご説明につきまして何か皆様方のほうからご質問やご提案などがありましたらぜひお聞かせいただきたいと思います。

僕も事前に拝見させてもらって第１章、第２章、第３章という部分において、全体構成を見直されて非常に流れが良くなったのではないかなと思っています。前回のときにも話をさせていただいたと思うのですけれど、恐らく当事者の方が地域でお困りになっていたというのは間違いなくて、それを支援する支援者のほうも色々と連携、一人で抱え込んでしまうようなことも多々あるのではないかというところで、これが実際には各圏域に地域のネットワークを作っていこうというようなことで行ってきたところなのですけれども、このヒント集は流れをしていけば地域で課題を解決していくというプロセスに沿った内容になっているのではないかなと思っています。いわゆる支援者がこれは困ったということにおいて、では、困り事をどう軽減させていけるかというところが恐らく支援者会議であろうと思います。

そして、一例が一定上手くいったということが今度は地域でノウハウが蓄積されていくのだろうということになるので、地域の人材育成というか資源をよりよいものにしていくというところが例えば、事例検討会のような形で研修というようなことに流れていくのではないかなと思います。今までやってきたことをいわゆる水平展開というか、じゃあ、うちでも同じことができるかなと感じてもらえるのが事例検討であったりするのかなと思いますけれども、ぜひ今の状況についてご感想でも結構です。また、この点についてはというようなこと、地域で皆様方がご支援されておられる中で日々の課題について、こことは少し離れる状況でも地域ではこのような形で進めているというようなご意見でも結構ですので、ぜひご発言いただければと思います。いかがでしょうか。お願いします。

○橋本委員　８ページのところなのですけれども、支援会議の進め方、開催決定というところで、これは相談支援事業所とか基幹相談支援センター、市町村等が中心となり、となっていますけれど、実際に主体になるのが、一番どの部分が勝るのかなという。声かけをするところがないとなかなか集まりにくいのではないかと思うのですけれど、それはどう考えたら良いでしょうか。

○事務局　その方がどういうサービスを使われているのかとかどういう状況にあるのかによって中心などが変わってくるのだろうなとは思うのですけれども、多くは基幹相談支援センターだったりとか市町村が中心になっていくのではないかと思うのですけれども、実際、実務をされている基幹センターの方だったりとか市町村の担当者は感触で言うとどんな感じですかね。教えていただけたらありがたいです。

○増田ＷＧ長　何かあればお願いします。

○梶本委員　参考になるかどうかは分かりかねるのですが、やはり事業所の方々であったりとか計画相談の方々であったりとか基幹相談支援センターの方々であったりとか、やはりこれは支援方針について協議をしたりとか共通の認識でここに行ったら違うことを言われてということがないようにする必要がある場合は、随時集まってケース会議をさせていただきます。やっぱり必要性を感じているところが、今、こんなことで困っているのだということを吸い上げていただいて、開催をさせていただきます。市の職員が入らせていただくことも多いですし、実際に地域課題として資源がないというようなことであったりとか、やっぱりここは認識しないといけないというような場合は自立支援協議会の事例検討会議に挙げていただいたりとかというようなことを富田林のほうではさせていただいたこともございます。

○事務局　なので、参加機関の決定、８ページの（２）なのですけれども、いわゆるサービス等利用計画のサービス担当者会議は相談支援専門員が中心になりますけれども、地域の困り事という形で言うと、中心になっていただくのは今おっしゃっていただいたように相談支援専門員、基幹相談支援センター、市町村職員等が中心になって会議の主催者となって呼びかけをしていただくのだろうなと思ってこういう形で入れさせていただいているのですけれど、違和感ないですか。

○梶本委員　ここはなかなか言い切れないですね。やっぱり個々に一番困っていらっしゃる方が随時声をかけていただいて集まらしていただいて、割と柔軟に対応させていただいて。

○事務局　なので、開催決定のところは支援会議を開くことを決定する。その次にご本人の関わりのある機関から支援会議開催の懸案を受けることもありますと。事業所が困って集まりたいのですけれど、というところもあるだろうと思ってそういうふうな記載を明記しています。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。どうぞ橋本委員、何か。

○橋本委員　それからもう一個、今回は結構良い形でできてきたかと思うのですが、症例の提示の中で先ほども少しお話させてもらったのですけれど、高次脳機能障がいのイメージを持っていただくために症例の２、３例挙がっていたと思うのですけれど、失語症とか片麻痺とか高次脳機能障がいという格好で書かれていることが多くて、国が言っている高次脳機能障がいの中の四つの障がいのどれに該当するかというのが一例は書かれていたのですけれど、他にはなかったので、もしこれを見られる方がみんなが高次脳機能障がいという言葉でお互いに言いあっていると内容が少し違いますので、少しどうなのかなと。別に間違いというものではないのですけれど、具体的にイメージしていただくことも必要なのかなと思ったものですから。

○増田ＷＧ長　いかがですか。１８ページのところは、例えば、１例目は失語症、歩行障がい、高次脳機能障がいというところでそういうことですよね。

○事務局　圏域と確認しながら修正します。

○増田ＷＧ長　他、どうでしょう。最初のご質問に戻るのですけれども、支援者会議は先ほど事務局のほうからお話があったように支援の流れの間のどのタイミングで起きるか。これは何か困り事があってから会議が行われることもあるでしょうし、いやいやと。これから地域、いわゆる地域移行を進めるという形で行われるときもあるので、例えば、私たちが堺市の支援拠点でやっているときには、多くは回復期の病棟の方から連絡があって、じゃあ、一回目の支援者会議は病院で行われます。大抵うちの支援拠点のセラピストが行くのですけれども、その方が聞き取ってこられて、今度は計画相談をつけなきゃねという話になったときには基幹に入ってもらって今度は我々が医療情報をつないでいくみたいな形で何度も何度も、いわゆる流れを確認していくというような支援者会議もあれば、それと、一番タフな会議なのは、非常に困難事例があるのですということで、本当に地域で皆さん方が八方手を尽くされた上においてもなかなか解決の糸口がというようなときの会議というような、いわゆる流れの中で確認のために良い形での支援をつないでいこうというような会議もあれば、本当に支援者もご家族、当事者もそうかもしれません。困窮した状態で行われる会議というので、ちょっと意味合いが違うのかなというふうにも思ったりもイメージとしては感じています。

どうでしょう。皆さん方会議等にもご参加されたご経験もあろうかと思います。どの場面でどんな検討会議が行われているかということも含めて、少しご発言いただければなと思います。

○原田委員　どんな場面で支援会議がというお話なのですけれども、退院前と、何か問題が起きてきて、Ａ事業所からもこんな話が挙がった、Ｂ事業所からも挙がってきたというたびに、挙がってくるあたりは相談支援専門員や地区担当のケースワーカーに情報が集まってくるので、そこがちょっと今問題が起きているね、ちょっと支援方法を検討し直したほうが良いかなというあたりで、支援者を集めて検討会議をするということが結構多かったりもします。

後は本当に地域に向けて、施設や病院から地域での定着に向けての支援会議も結構あります。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。どうでしょう、他の委員の方、呼ばれて出て行くようなこともあったりするのではないかなとは思うのですけれども、反対に召集側というか、ちょっと皆さん集まってくださいという形での発信者としての場面もあろうかと思います。どうぞご経験の中で何かあればぜひ。

○山口委員　支援会議なのですけれども、相談支援事業所とか病院から退院するときとかは相談員さんから相談があったとしても、そういう支援体制がまだ構築されていない状況のときには市役所のほうに相談が入るのが多いとは思うので、市役所の僕らが相談業務をしている者がまずメインとなって地域の相談支援事業所、その他必要なところを本人の同意をとってまず集めて、そこから支援を動かしていき、基幹型もしくは計画相談の事業所が入ってそちらのほうにメインを引き継いでいくというような形で調整していくのが多いので、最初、受症後は福祉サービスに乗るきっかけというところでいくと、羽曳野の場合であれば市役所の職員のほうが最初集めて相談支援事業所をかんでいくと。そこをまず進めていくという支援会議が多い形にはなります。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。そうですよね、今おっしゃられたように恐らく行政は地域の橋渡し、調整役という形で回られる方が多いですし、いわゆる議論が円滑に進むような形でファシリテーターをしながら、実際には例えば生保とかがついたりするとそこで一つずつ回っていくのでしょうけれど、今度は、恐らく行政は後ろ盾というか、本当に困ったとき、いわゆる見守り側に少し回られることが多いのではないかなというイメージではいます。

○奥田委員　実際、呼ばれて行く会議のほうが圧倒的に多いのですけれども、現在、呼ばれるというパターンは相談支援センターか、もしくはケアマネジャーさんからお声かけ頂いて、あと、病院のほうから退院に当たってという形なのですけれども、今回のこのツールが、中身を読んでいくと色々なケースもあって、活用していけるかなと思うのですけれども、最初にわたったところがこの活用の仕方をしっかり把握して、今、ここで話しているようなプロセスで持っていけると関係機関が集まって、当事者の方の支援が課題が明確になりながらスタートが早く支援が始まるのかなと思うのですけれども、今、役所から相談があって呼ばれるケースがないので、ここではやっぱり役所、相談支援事業所がこれを中心になって活用していくような形で書かれたような印象なのですけれども、これが出来上がったあとの各市町村への下ろし方というか、活用の仕方がどのように進んでいくのかというところがお聞きできたらなと思っています。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。いかがでしょうか、事務局のほうで何か。

○事務局　細かくイメージできているわけではないのですけれども、こちらのセンターでも市町村職員さん向けに高次脳機能障がいの研修会とかもしていますので、そういう場で活用したりとか、勿論出来上がりましたら各市町村のほうにもお送りさせていただいておりますけれども、それに加えて研修会でこの要素を使いながら研修をできたら良いなと考えています。

○増田ＷＧ長　私もまさに奥田委員と同じで、ちょうどこの資料を頂いたときに、前のときにもお話したと思いますけれど、資源マップがあって、使たらええで帳があって、ヒント集があってということをどう使っていけば良いのかを研修という形が良いのかもしれませんけれども、どういうふうにこれを使いこなしていくかみたいなことをたぶん１時間、２時間の研修ではなくて日にちをかけたような研修をしていくと恐らく、地域で高次脳機能障がいの支援を行うスペシャリストを作っていくための重要なツールになるのではないかなという印象でしたが、恐らくできました、読んでおいてくださいではきっと活用もされない、されないといったら大変失礼ですけれど、十分それを、やっぱり何か火付け役というか、スターターでこんな形で使うことを一定リードするタイミングや研修なのか情報発信なのかもしれませんけれども、それがあって初めて。こうなると、先ほど言ったように上手く回りだすと回っていくのだろうなと思うのですね。どうでしょう、ほか何か気になる点とか。どうですか。

○仁木委員　今回の高次脳を支えるヒント集なのですよね。これは基幹なんかは介護保険の包括のほうから相談なんかはよく受けます。介護保険の制度を利用されている実は対象者なのですけれども、実は高次脳機能障がいでね。介護保険の対象のサービスが利用できないのだけれども、どうしたらよろしいかのようなときはヒント集なんかは事例なんかがとても良い参考になるのですよね。だから、高次脳機能障がいの特性を捉えるのも大事かもしれませんけれども、退院するときに介護保険の制度を対象にするのではなくて、障がいも一緒に関わっていくような一番初めの入り口、相談機関の中でその基幹がありますとか計画相談を立てる相談支援事業所でありますとか、直接つなぐというよりもそこは会議を招集するときに一緒に関わるところでは大いに役立つものだなと思います。(大阪府の)南のほうはまだ行政のほうにどうしても相談が入って、そこから基幹に入って計画相談を立てるのが介護保険の制度なのか。そんな形でつないでいくというような仕組みが残っておりまして、反対に非常に使い勝手が良い支援集だなと南のほうでも感じておりますので、反対に使い勝手は、研修とかでは使いやすいなと思いました。ありがとうございます。

○事務局　これができたら市町村さんに、私たちが送るのは障がい福祉担当課に送ることになると思うのですけれど、障がい福祉担当課にはぜひ高齢のほうの担当課とも連携していただいて、この情報を伝えていただくというようなことも併せて書き添えたいと思います。高齢のほうでは地域ケア会議が障がいより一歩進んで行われていると思うので、地域会議等でのご紹介も含めてどういうふうなことでまた、各市町村さんに送らせていただこうと思いますのでよろしくお願いします。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。恐らく色々な形で地域での会議が行われるのだろうなとは思うのですけれど、そういうのがあるのを知らなかったみたいなことにならないようなところが大事なのかなと思います。例えば、自立支援協議会においても堺なんかは色々な形での取組を各区でやっていたりとかするのですけれど、障がい理解みたいなところにも力をずっと注いできたところですけれども、いわゆる原点回帰というか地域での困り事を議論し合おうということで、いわゆる困難事例をみんなで議論する場としてということは、例えば、２９年度からそうだったのですけれども、３０年度は大きな取組の課題にしているのです。個別の事例の検討をしっかりとしていく。本来自立支援協議会はそういう場面だったりするのですけれど、そういうことをということなので、例えば、各市町村の自立支援協議会にもしっかりと情報周知等できれば。繰り返しになりますけれど、どう活用するかという、本当に最初のところだけでもかまわないので、単に読んでおいてくださいではなくてこういうふうにしましょうというふうな、仕掛けるみたいなことを別途行っていくことが大事だなと思います。恐らく高齢のところにも伝達していくことが、お恥ずかしいですけれど、我々高次脳機能障がいの支援拠点としてやっていても、障がい福祉のところとやり取りしていることは同じ庁内なのだから高齢の部分とつながっているのかと思うと、意外とつながっていなかったりというようなこともありますので、そのあたりぜひ行政のお力というか後ろ盾が必要かなと思っています。

他どうでしょう、どのようなことでも。

○舟木委員　拝見させていただいて、私自身が今、医療機関に行って基幹相談のほうも同じ法人の中で行っていて、立場によってこのページを重点的に読もうというのがすごく変わってくるなという資料で、本当に個別で医療機関からも発信して支援会議を開いてほしいという発信のときは本当に前半のほうもすごく重要視して読ませていただいて、でも、やっぱり社会資源のことを協議会の中で検討していきたいことというのは後半のほうを重点的に読んでいて、この立場の方もぜひこのページを重点的に全体の中で特にというので何かポイントとしてあるとすごく迷わずに項目にたどり着けるなと思いました。地域課題分析だったり、個別の事例を積み重ねて協議会の中でしていくためにはというので、この辺のページを重点的に読むとすごく役立ちますよというアピールがあると、すごくたどり着きやすいなと思いました。

それと、仁木委員が言っておられたように高齢分野の方も高次脳機能障がいの支援のこととかを本当に知りたいということで、茨木の中でも本当に勉強会をしようということで高槻の先生を呼んだりとか、ケア会議も一緒にやったりというようなことも触れていましたので、高齢分野の方にも一緒にというところは、こういう活用というところのアピールは仁木委員の発言を聞いて本当だなと思いました。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。どうでしょう、他の視点でも全然かまわないのですけれども、何かお気付きの点とかご意見あればぜひぜひ。内容もそうですし、ヒント集の活用の仕方とか何か思いつくところがあればぜひご意見いただければと思います。

○山口委員　資料４１ページ、４２ページの国立障害者リハビリテーションセンターの資料なのですけれども、４２ページのところの障がい福祉サービスと介護保険のサービスがどんなものかと書いてあるのですけれども、結構同列で並んでいて書いてあるというところで、色で分けるなどした方が分かるのではないでしょうか。ケアマネの方とか僕らが関わっていく中で、介護のほうと障がいのサービスの違いとかというところを聞かれて答えることとかもあったりするのですけれども、これは両方書いてあって、例えば二つが同時に使えるとか、これがすべて使えるのだとかという形で思ってしまったりとか、どっちがどうなのかというのが、この表だけで行くと分からないので、ちょっとそこの部分で見た人に対してもしかしたら混乱が出てくるのではないかなというのが結構気になった点であります。以上です。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。確かに山口委員がおっしゃるように全部使えるのかというようなこともあるし、条件によっては同じ高次脳機能障がいといったことでも脳血管疾患なのか、外傷なのか、年齢はいくつなのかみたいなところで状況は変わってくるのだろうなと思うのですけれど、それを知らせるのか、それともこういう資源として、では、これを使うに当たってはこうですよとここにすべてを書くのか、これを見て、なるほど、じゃあ、これは使えるのか、この人にとっては使えないのかと考える入り口として置いておくのか、どう活用すべきなのかをフロー図として出すのか、ここのあたりは見せ方はずいぶん違ってくるのだろうなと思うのですけれど、府のコーディネーターのほうで何かイメージするようなところがあれば、どうでしょう。

○事務局　一番見せたかったのは、こういう流れがあるよという。流れの中で書き方が変わってくるよということをイメージしていただくところを、支援会議とかをするときの関係機関として関わってくるというのがあるので、そういうのがあって入れたというのが大きいのですけれども、あとは具体にこの場合だったらどうなのかというようなところは高次脳機能障がいハンドブックのほうにはフローチャート図みたいな形で４０歳以上か４０歳未満かとか、交通事故なのか脳血管疾患なのかというような形で分かれているので、３点セットではないのですけれども、色々と使い分けながらにはなるのかなと思います。

○増田ＷＧ長　本当に今、お話あるように見せ方なのだろうなと。１冊ですべて網羅するというのか、それともこういうふうにステージごとというか、流れの中で医療的なケアが終わった後こんなふうに流れていくのだということも表面的な資源の名称、これが使えるのか使えないのかは個別のケースになるので、そのときにはその制度を紐解くもう１冊の本を開きながらという形になるのかなと思いますけれども、どうでしょう、他の方。

○丸山委員　少しずれるかもしれませんが、今回、前回のワーキングでもハンドブックと前回の使たらええで帳と今回のヒント集というところの活用の仕方をもう一度僕自身も考えさせていただいて、もう一回一から全部読ませてもらったら、最初に見たときと気付きが違って、今だったらこういう活用の仕方があるのだとか、ここはこういうふうな使い方があるので再確認ができることは現場においても非常に多かったのです。なので、先ほど増田委員も言われたように非常にこの短期間の間にヒント集をここまで構成をしていただいたのは本当にすごいことだなと僕自身も思いまして、すごく見やすくなっておりますし、前回出たヒアリングに対してもすべて結構丁寧に対応していただいていることがあるので、逆に、僕ら自身が圏域において、これをどう活用していくかというところが非常に大事な観点かなと思っております。

さきほど増田WG長が言われたように、回数を少し重ねるような研修、これを活用していくハンドブックの活用、ツール集の活用、ヒント集の活用といったこれを使った架空事例の対応だったりとか、このヒント集を活用した対応の仕方が次の課題になってくるのかなと思うぐらい本当によくできたヒント集になったなというのが僕自身の感想的な部分でした。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。事務局のほうもご苦労おありだろうと思うので、今のお話で少しは苦労が報われたなと思うところではないかなと思うのですけれど、どうでしょう、また、ちょっと視点を変えた上でまだ議論の時間はあるのですけれども、作成側として意図としてのところ、反対にこういうような形でこういうところは作成に悩んだ結果こうなったのだけれど、その辺についていわゆるこれをA案とすればB案というようなものがあるのであればそこもまた聞かせてもらえたらなと思います。

○事務局　第２章の支援会議のところで、支援会議をやって、結論をちゃんと最後確認しましょうねと書いているのですけれども、確認するための方法はヒアリングに行く中でも色々とこんなことも使えるよねのような話はあったのですけれども、著作権の関係でご紹介するのが難しいものが多かったのです。そういう中で、泉佐野市のホームページにサービス等利用計画の様々な様式が掲載されていて、その中に支援会議の議事録の様式があるのを見つけたのです。その様式は残された課題を書く欄があって、そこからまた地域課題の抽出のほうにつながっていくのかなと考えているのですけれども、泉佐野市のほうではそういうのは現在も使っておられるのですかね。使っておられるとしたらどんなふうに使っておられるのかを教えていただけたらと思います。

○増田ＷＧ長　少し教えていただいてもよろしいですか。お願いします。

○仁木委員　お手元に資料があると思うのですけれども、これは個別支援会議と書いているのですけれども、これら個別支援会議だったりとか関係機関との連携会議とか、色々な部分に利用できます。エコマップがないと思うかもしれませんけれども、一番初めに入り口のところで連携のところの資料がありますので、それを受けて関係機関と何を今回検討したのかというのは100文字要約のところですよね。そこに、会議を招集したい者が書きまして、検討する内容と、結論として会議ではどうなった、残された課題、４のところでまとめさせていただいています。これはモニタリングの記録にもなっていまして、じゃあ、次回は３ヶ月後にどこの誰をどの機関が確認しましょうというようなところにも利用できますので、結構便利に使わせていただいているというのが、上にある個別支援会議、ケア会議の議事録であります。これがだんだんと積み重ねていって、じゃあ、半年後に本人さんはどうなっているといってまた、大きな会議を開くような形で利用はさせていただいています。社会資源を発見してみようという部分もそうですよね。同じように社会資源で検討したいとなれば、同じような形で、この部分は違うのですけれども、同じですよね。検討するときには個人の困り事というよりもその人が地域の中でどのような生活をしたら良いのかは結構課題になります。あと、介護保険との整合性というか、障がいの部分の福祉サービスとをどう連携させたら良いのかというときにも議事録なんかはよく使わせていただいておりますので、現在も使っております。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。

○事務局　残された課題のほうから社会資源の（改善・開発）という形にはどんなふうにつなげておられるのか教えていただけますか。２枚目の社会資源を発見してみようというものを一緒にコピーしてお渡ししたのですけれども、滋賀県の相談支援研修とかに使われておられるものを参考に一回こちらの方で作って、この事も連動してくるのかなとは思ったので一緒にお配りしています。

○仁木委員　そうですね。本人さんが今、基幹のほうに相談があって社会資源を見直そうというようなところはどこかというと、居場所なのですよね。「我が事・丸ごと」といって地域の中で障がいの方、高齢の方をどのように受け入れていこうというのが課題になっておりまして、まさに今、一番困っているのが日中の過ごす場所なのですよね。お風呂だけに入りたいとかそういうのではなくて、本当に過ごす場所がないのです。１時間、２時間。それをどういう形で皆さんに分かっていただこうかなと思ったときに、さっきの５ピクチャーズですよね。これを一番初めに皆さんと一緒に考えました。地域の中を皆さんで見直そうみたいな。公園とか公民館とか図書館とかということが出てこないのです。介護保険の制度なんかを利用されている方々は特に。あと施設の方もそうですよね。たぶん地域の住民さんであったりとか社協の方であったりとＣＳWが入っていたらその辺の言葉が出てくるのです。そこと、どういうふうに関わっていくのか。だから、インフォーマル。いかにお金を使わなくて皆さんと一緒に障がいの方を理解していただけるのかのようなところで２枚目につけている資料なんかが活かされていくのですよね。そういうところは社会資源集にも活かされていますので、ホームページ等で確認していただけたらと思います。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。どうですか、今ご説明いただいた形で。

○事務局　実は、本文からの事例の中でも社会資源の工夫の仕方を書いているのですけれども、言葉だけで書いているので、まず、会議については結論で、残された課題を次に向けて考えないといけないので、そのときに、特に高次脳機能障がいの方でも日中のサービスになかなかつなげられない実態の中で、では、居場所をどうするかみたいなところがすごくあるのですけれども、そういったときに、例えば、まずはサービスにつながらない段階でいきなり(サービス利用)というのが難しいときには、そういうインフォーマルサービスの使い方を伝えたいがために言葉では書いているのですけれども、なかなか具体的な検討の手法が出せないなと思っていたので、今みたいな話の中で例えば、高次脳機能障がいの方を日中の居場所作りを考えるというようなことをされたことありますか。

○仁木委員　あります。

○事務局　また教えてもらって、それを何か加工して載せられないかなと。

○仁木委員　なぜ少し例を挙げたかというと、こういうのは今社会参加といわれますよね。公園に行きたいというものがありました。介護保険では移動支援はないですよね。じゃあ、障がいのほうのサービスを使って移動支援で利用できますかという形の相談とかを受けたりします。ケアマネジャーさんがそこまで理解されている方だったら話は早いのですけれども、全く制度を別のものと考えている方ならその辺は入らないのです。移動支援を使えますかという形で相談に来られても、どういう目的で、どこに行きたくて、じゃあ、日中過ごす場所はどんなところが想像できますかといったらデイサービスしか出ない。映画に行きたいとか色々なことが出れば一緒に考えていくことができるので、反対にそういう検討が今多いです。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。他どうでしょう。今、インフォーマルの部分というのが非常に個別性も高いので、こういうところにのってこないのですよね。でも、意外とあったりもするのです。例えば、堺の話になって申し訳ないのですけれども、各区に協議会があって、区でインフォーマルな資源集を作って、それこそ何々町のスーパーの前のベンチは使えるみたいなことをやるのです。前のパン屋さんのおばちゃんが非常に声をかけるのが上手で、結構知的障がいの方々が本当に憩いの場としているとか、ちょっとぐらい騒いでも全然嫌な顔をしない散髪屋さんみたいな感じのインフォーマルな資源集を作っていて面白いなと思ってたのですけれども、でも、なかなか個別性があるのでのってきにくいし、また、インフォーマルな資源を使いこなせる方は地域での支援の方法に非常に長けた方だろうというふうにも思っているので、もしかすると私のイメージが違うかもしれませんけれど、どうやっていったら良いのかなと思っている方々に対して、いわゆる初めてという方、経験はまだ浅い方にインフォーマルなものも使っていこうというのはさらに、ハードルは高いのかなというようなイメージかなと私は思っています。ただ、非常にインフォーマルなものこそ実際の地域資源として有効なものであることは間違いないところではないかなと思っております。

どうでしょう皆さん、他どのような視点でも結構ですので、ぜひご意見いただければと思います。

○橋本委員　直接の関係はない話なのですけれど、１週間前に泉州の地域リハ連携会議がありまして、半年に一回やっているのですけれど、今回、問題としては高次脳機能障がいがタイトルに挙がっていまして、急性期病院は全く興味がないという結果があって、療養型も興味がないと。気を使っているのが回復期リハ病棟というところがやはり注意しているということなのですけれど、では、診断とかをつけられる、あるいは治療が入れるかというと、今の医療制度もあってなかなか治療とか診断自体が難しいという結果で、皆さんが一番大きな問題に考えているのが自動車運転なのですよ。これをどうするのかというのが一番の結局最終的な問題になりまして、それはまだ解決はすぐに無理だからということで、次回に延ばしているのですけれど、今回は地域のそういう話なのですが、医療の側ではある程度興味を持っているのは回復期リハが高次脳には興味を持っていると。あとのところはあんまり分からないみたいな感じで放っておかれてしまっているという感じだったので、もしこの参加とかを持っていく場合には回復期リハの病院相手に進めるとまだ話に乗ってくれるかなという感じがします。

ちなみに、私たち泉州の先ほどの医療から社会福祉への流れ図がありましたけれど、あれの泉州版のどういう事業所がそれぞれに参加しているかを一覧表にしようということを今回の宿題にしていまして、それができれば泉州のすべての病院に情報はお送りしますというふうにしていますので、この流れ図の非常に簡単にしたものなのですけれど、それと、どこそこのどういう組織が関係しているというのを一覧表にして出そうかと思っております。

○増田ＷＧ長　貴重な情報提供ありがとうございます。今の橋本委員のお話し聞かれて。

例えば、４３ページのところで、介護保険は当然医療と介護をつなげて、それぞれ報酬に算定できるというような形で、いわゆる経済的な誘導になっているのですけれど、福祉につなげるというのは当事者の方々にはきっとメリットがあるのでしょうけれど、事業所に対してメリットはきっとないのだろうなという形で、大阪府のほうも色々な形でご発言をされておられるかと思うのですけれども、この辺についてぜひお話聞かせていただきたいなと思うのですけれども、どうでしょうか。

○事務局　介護保険と医療との連携もずっと前から謳われて久しく、なので、退院支援加算が診療報酬の側にもケアプランセンター側にも加算がつきますけれど、障がいはついていないので、それについてはずっと前から国にも、特に高次脳機能障がいのような、高次脳機能障がいに限らずですけれども、ただ、医療と密接に関わる障がい分野において、上手く地域につなぐことがより早期に適切な支援につながるということもあって、これについては国に対して再三再四、障がいの側にも地域連携加算のようなものをつけてほしいといっています。

今回、診療報酬改定で退院支援加算の対象に、今まで介護保険の事業所だけだったのが相談支援事業所も入るようになって、ずっと言い続けているところをちょっとだけ見てくれたのかなとは思っていますけれども、言い続けることが大事かなと思っております。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。というようなことをぜひ地域で、例えば、医療機関にご入院されておられる方々の支援に早期から入るようなことがあったときには、そういった情報をきちっと、ああそうなのだと思われた方もいらっしゃると思うのです。ずいぶん前から大阪府が国に対してご要望されておられたのも私も見ておったので、そういうことが大事なのではないかなと思っています。

それと、ヒントになるかどうか分からないのですけれど、加算みたいなものというのは、これも全体的な制度なので、報酬としてということなのですけれど、去年だったか一昨年だったか、兵庫県の逢坂先生の講演を少し聴くことがあって、いわゆる地域の包括ケアのことを色々なところで、東北でもやられていましたし、広島だったか色々なところに行って仕掛けをされておられたのですけれど、その先生のお話だと、うろ覚えのところもあるのですけれど、病院の看護師長の方々にお集まりを頂いて、介護保険の事業所なのですけれど、介護保険課のところからいわゆる退院するときにちゃんと医療機関と紐付いている方々、紐付いていないままにご退院される方がいらっしゃる病院がありますみたいなことをすると、逢坂先生も本当に面白おかしく話をされておられたのですけれど、看護師長がその会議に出て、自分のところの病院はそういう地域にケアマネジャーをちゃんと紐付けていない形で退院されておられる方が何人かいらっしゃることを知った看護師長は、病院に帰ってうちの看護はどうなっているのかみたいなことを言われるそうなのです。そのような仕組みで、包括ケアのいわゆる人と人とのつながりの中で、じゃあみんなが地域で他の支援をどのようにやっているかという、隣の人のご様子を見ることで自分のところもやらなくちゃみたいなことの仕組みづくりが単なる制度だけではなくて大事なのですというようなことをお話されて、なるほどなと。

確かに看護師の方がというわけではないのですけれども、病院の中で一番ネットワークをお持ちなのは看護部門の方々かなと思ったので、病院長を呼んできてもダメなのですということは逢坂先生がおっしゃられていて｢なるほどな｣と。看護師長に集まってもらって会議をすることが、医療機関の中のネットワーク作りの中で一番有効な方法だということを笑いながらお話されておられたので、もしかすると色々な場面で、いわゆる会議をしようというとき、どこに発信するか。ＭＳWの方をお呼びすることもあるかもしれませんし、病棟のコントロールをされておられる退院部門の看護師さんにぜひともという形の方法もあるのかなと思った次第です。ちょっと参考になるかと思い、ご紹介させていただきました。

どうでしょう、他何かこのツールのこと以外でも結構です。地域での課題などもせっかくの機会ですので出していただければと思います。どうぞ。

○奥田委員　先ほど事務局がおっしゃっていた、声をあげ続けていく中で反映されて、そういう制度ができてきたかなという仕組みのところへもつながるかなと思うのですけれど、たぶん今回このヒント集があったとしても、資源的にも不足していて、例えば、グループホームなんかは空きがあったとしても、高次脳機能障がいの方をそこで受け付けてもらえないであったりとか、ショートステイとかもそうだと思うのですけれど、まだまだそういう状況があると思うので、そういった解決できない問題を挙げていく、どこにそれを挙げていって、どういう形で意見を反映してもらえるような仕組みを作ってもらうために集めていくかというところもすごく大事になってくるのかなと。

この間、この会議が終わったあとに帰りに少しお話をしていたら、日中に通う場所が足りないなと。どこかに通いたいといっても高齢者の介護保険の対象にはなっているけれども、７０代、８０代の方となかなか合わないなと。そうなったときに知的や精神のところを紹介するけれども、それでも合わないという場合があって、やはりそういう中途障がいの方、高次脳機能障がいの同じ世代の同じ境遇の方が集まっているような場所があったほうが良いなという。こういうところも挙がっていくと、今ある市町村の中での資源の中で｢うちはそういうのができるかもしれない｣というところにつながってくるのかなと思うので、そこの声を拾い上げる仕組みもこういう中に組み込んでいけたらなと思うのですけれど。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。どうでしょう。これもすぐにというのではないのでしょうけれども、例えば、先ほど仁木委員のほうから話が出ました、やっぱり色々議論しても残された課題は出てきますよね。これをどうくみ上げていくというか、一つの大きな塊にしていけるもの、共通項があれば共通項、分離すべきものは分離すべきものという形になるかと思うのですけれど、こういったものを、地域での課題をどこか集めるというようなことで、今、奥田委員のお話聞かせていただいてすぐに解決策が出なくても少し報告する場所ではないけれど一定ためておくところがあっても良いのかなというふうにも思ったりもしました。

どうでしょう、この点、いわゆる大阪府に残された課題はたくさんあったりするのでしょうけれども、この後すぐに解決されるものばかりではないと思うのですけれども、この辺何か地域でのご経験などもあれば。

○梶本委員　先ほど奥田委員がおっしゃったように高次脳機能障がいに関わらず、すべての障がい特性の方々に対応できる資源が本当に脆弱で、今でも強度行動障がいの方々であったり、重症心身の方々であったり、先日、厚労省から報酬改定の発表がありましたけれども、こういった場でお話をすることではないのかもしれないですが、これで果たして現場の方々が、運営しやすい体制ができるのであろうかどうかというところで、本当に切羽詰った状況です。今も、私のほうも強度行動障がいで、虐待ケースで、昨日施設から追い出されたとかね、本当に日々そういった相談が毎日のように寄せられている中で、本当に資源がないので、市としても困っているところです。ただ、一番困っているのは市とか現場もさることながら、本人さん、家族さんであることからも我々もそこは尽力をしないといけない使命であると感じています。

富田林市の場合は自立支援協議会を基幹相談支援センター、(大阪府障害者)福祉事業団の相談支援センターあーるのほうが中心になってやってくれているのですが、ホームページのほうも出させていただいておりまして、地域課題ということで、そこで出た課題はすべて「つぶやき」というコーナーに挙げさせていただいていますが、高次脳機能障がいの方々の通う場所がないということも挙げさせていただいていますし、声は上げ続けていくしかないのかなというところで、その次の段階ですよね。そうしたら、どう資源を展開していくかというところで、本当にここは大阪府さんにもお知恵をお借りしながら、一緒に考えていただけたら市としてもありがたい、現場の方々としても本当に助かるのかなと感じております。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。どうですかね。また、大阪府に聞いて申し訳ないのですけれど、恐らくコーディネーターのほうには地域での課題が挙がってくる。いわゆる府民の方もそうなのでしょうけれども、その背景には地域で色々検討された中でなかなか解決しきれないような課題もあるのかなと僕は思ったりもするのですけれど。大体そういうものが基点となってこういうツールの作成につながってはきているのだろうとは思っていますけれども、どうでしょう、地域からの声を拾っている中で、お感じになられているようなことがありますか。

○事務局　色々な相談を受けて、確かに行く先がないという話も聞かせてもらうのですけれども、私たちは拠点の相談部門として最大にすごく大事な役割だと思っているのは支援者だったり、市町村の方々のバックアップというところはすごく役割として感じていて、その中で、今つながっている人たちの支援をしています。しているのだけれども大変だと。どうしたらよいか分からないというところで、現場は限界だという人の相談は受けていて、そういったところに対して専門相談機関として私たちが行って、どういう状況なのだろうとか、困っているってどういうことなのだろう、何が起こっているのだろうと話を聞いていって、その中でじゃあ、例えばそういう場合はこういうふうに考えたらどうかなとか、じゃあ、こういうことを考えられるのだったら、例えばそれに対してこういう対応が考えられるかなみたいなところを一緒に考えていくところを大事な役割を担っていると思っているのですけれども。なかなかないものを作り出すということは私たち大阪府でも難しい面はあるのかなと思うのですけれども、今、しっかり支援ができる先が見つかった。けど、そこがすごく大変だというところでも、大変だから支援をやめてしまいますというふうにならないように、そこでもう一回何か工夫ができないかな、何か私たちが行くことで少し楽になることもないのかもしれないのだけれども、何かじゃあそういうことでやってみようかなということで変わっていけたら良いなとか、そのことで上手く変わっていって、また、大変だったけどそこを乗り越えて頑張ってみますみたいなことも言っていただくこともあるので、そこのところでは何か役割はすごく大きなものを背負っているのではないかなと思っています。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。まさに今おっしゃっていただいたところで恐らく現場では本当にこの方法で合っているのかどうかみたいなことで行き詰まっている部分もあったりしますよね。日々の支援は行っているのだけれども、これで良いのかということに関して話を聞いてくれるだけ、もしくは共感をしてくれるだけなのかもしれませんけれど、自分たちのやり方はなるほどと。その方法で今現時点においては適切な対応だということを理解していただける方が居るか居ないかだけで、たぶん現場は全然違うのだろうなというふうに、本当によくやられておるということを、別にお墨付きをつけるというわけではないのですけれども、その状況をきちっと専門機関が理解をしているということだけでも私はずいぶん現場は違ってくるのかなと。自分の職場での経験においてはお話聞いてもらえただけで明日から頑張れそうですみたいな方も中にはいらっしゃいますので、このあたりは非常に大きなところではないかなと、拠点の役割の一つではないかなと思っています。単に話を聞くだけという意味ではなくて、その状況をきちっと、いわゆる支援現場の現状をしっかりと受け止めるということがまず最初なのだろうなと思ったりもします。そんなことにもここにも入っていますけれども、一番最初にチームの一員ですということを明言されておられるところが、よりキーポイントではないかなと思っております。

どうでしょうか他の方、ぜひ現場のほうの声も現時点での課題なども含めてせっかくですからご披露いただければと思いますが、どうぞ皆さん。

○丸山委員　今の話を僕自身も聞いて、数年前に関わった事例で支援会議のことを少し思い出してはいたのですが、そのときのメンバーが交通事故に遭いまして、本来は福祉関係職では全然なくて、ちょっと思い出すだけでも、保険の代理店さんや会社の嘱託医さん、弁護士さん、法テラスの方、あと、警察関係、司直関係の方で僕自身が非常にそのとき困ったと。課題が全く合わない、その人の生活背景も全然違わないときに、どこにこの会議は持っていくのだろうと。それは非常に僕自身が一番困難というか、どこが答えになるのだろう、着陸点はと考えたことを思い出しました。というのは、これを見ながら、今日のヒント集、ハンドブックもそうですけれど、少しあることで少し流れていく道筋が見える。今増田さん言われたように例えば、スーパーバイザー的に大阪府に電話をすることで、ちょっと一緒に考えるチームのスタッフが多くなる。こういうことを知るだけで、たぶん全然違う経験ができたかもなと思うのです。特に、それが数年経つことによって非常に課題が多く増えてきているときに、このような課題を僕たち自身はここでこれだけ話をして理解ができるものを、それをどう説明していくか、どう広げていくかというのは非常に大きな命題だというふうに本当に思わせてもらいました。すごくそのときに、これがあれば利用者さんたちや課題を持っている人に、もう少し明確なことができたのかなと思いながら今、話を聞かせてもらっておりました。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。本当にこの知識をというか、この情報をもってあのとき行っていればみたいな感じですね。本当にドラえもんでも居ればというようなところだと思いますけれど。

どうでしょう、他。そのあたりは恐らくこのヒント集の出来映えのところに上手く表現しているのではないかなと思ったりもします。

○原田委員　今、話を聞いていて思い出したのですけれど、うちも自立支援協議会の部会とかから色々な課題が挙がってくるのですけれど、大体毎年議事録をめくっていくと同じ課題が、去年も一昨年も一緒でしたみたいな課題がずっと続いていて、なかなか課題解決には向かっていないなという現状がある中で、今年度うちの地域包括支援センターの高齢の分野のほうで地域包括ケア会議をやっているのですけれども、その中で、１年で２事例、半年間で１事例ゆっくり事例検討する中で、今年度は障がいの分野の事例を挙げてもらえたのです。それでうちの基幹が事例を提供させてもらったのですけれども、その中で、グループワークで色々な方の意見を頂く中で、本当に違った視点というか、違った意見というか、例えば、障がいの分野の中で検討していると、同じ方向でしか考えていなかったのだなと。それはまた高齢の分野で、高齢の分野のヘルパーさんの事業所だって色々なところの事業所さんとかが出てこられてお話を伺うのですけれども、今までは自分たちは高齢だし、こんなことは思いつかなかったけれど、いや、この人若いしこういうこともできるのでは。こういう視点もあるのでは。みたいな話も出してくださって、すごく参考になったなと。違う視点もすごく大事なのだなとすごく感じた会議を今年経験させていただきました。

あと１点、このヒント集なのですけれども、中に書いていてすごく私が助かるなと思ったのがヒントと書いていて使たらええで帳の何ページを見たらいいよみたいなことを書いてくださっているので、これはすごく参考になるなと。なかなか現場でやっているとヒント集も見て、事例集も見て、色々なものを見てそれを全部頭に入れてというのはなかなか難しい中で、何かヒントないかなといったときに｢こっちも見たら良いのだな、こっちも見たら良いのだな｣というのを書いてくださっているのはすごく参考になって、ありがたかったかなとも思います。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。本当に他の分野の方々も交えて話すという、本当に目からうろことよく言いますけれど、こういう視点があったのかというのが非常に大事なことなのだろうなと思います。

例えば、いわゆる個別支援会議においてですが、私たちもどういう形が良いのかなというようなことで日々考えておるのですけれど、２年前に長谷川先生に大阪府に来ていただいたときに少しお話を伺わせていただくことがあったのです。長谷川先生は色々な方々を呼んでおられるのです。中には哲学者の方も入ってもらう。こういうような方がどうかみたいなことを哲学者も入れるのですかといって私は少しびっくりしたのですけれども、もう一つは当事者の方にもご参加いただく。長谷川先生のエピソードでは当事者の方も色々と社会的な行動障がいもおありの方で、いわゆる地域での困難事例だったのですけれど、長谷川先生のお話だと、当事者の方が自分のためにこんな方々がお話をしておるのだということを見て、ずいぶんお変わりになられたというようなエピソードを聞かせていただいたので、当事者に対しても一定会議をすることで、支援を考えることもそうなのですけれども、当事者を交えてみんなで考えることも一定の支援なのだろうなと思った次第です。色々な方に入っていただくのは非常に重要だろうし、すべてのことを知っている人ばかりが集まっているわけではきっとないのではないかなと思います。

どうでしょう、他何かご意見あればせっかくこの機会ですので。よろしいですか。まだ時間はあるのですけれども、全般的には今、原田委員からもお話あったようにハンドブックや使たらええで帳等の連携もすごく意識を頂いて、かなりのレベルまでブラッシュアップされてきたのだなと思います。

それと、本当にまとめでもないのですけれど、私としては当事者・家族会について少し力を失ってしまうこともあるのですというようなことを再三前回の会議でも言わせていただいたのですけれども、非常にそのことに対しての配慮もいただけたことを感謝しておきたいなと思います。本当にわがままを申し上げてすみませんでした。ありがとうございます。

どうでしょう、他何かぜひこのことについてということがあれば。ぜひぜひ、何か事務局のほうからでもあれば反対に事務局のほうから言っていただいても。

○事務局　舟木さんのおっしゃっていただいていたことをずっと悩んでいたのです。見せ方の工夫で。そこだけどうしても入れたくて、どう入れたら良いかをずっと頭の中でもやもやとして分からなかったので。また聞かせてもらって、それがちゃんとできるのかどうか分からないのですけれど、この立場で見たときにこことこことここを中心に見たら良いよみたいのがあったら、ボリュームがかなりありすぎるのでもっと焦点化したいなと思っていたので、また聞かせてください。ぜひお願いします。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。どうでしょう、舟木さんのほうで補足でもあればですけれど、何となくこんなふうにとかというイメージみたいなものはありますか。

○舟木委員　原田委員が言っていたように、ここに使たらええで帳があってと。私が今医療機関で実は高次脳機能障がいの方の地域移行とかを考えていかないといけない立場にまさに今当たりかけほやほやのような感じなのです。早速使おうとかと思っているのですけれども、やっぱりちょっと病院発信で支援会議も開きたいなと思っています。なので、そういう点で、発信する立場で、まず共有ということも含めてと思うと、前半の支援会議について、まず個別の会議についてを非常に着目して表と一緒に見るかなという立場で見ています。相談支援事業所で召集する立場であってもここはすごく大事にしているポイントかなと思いました。当事者の方々の意見も皆さんに読んでいただきたいなと思いながら見ていたのと、あと、自立支援協議会と基幹相談という形で課題を抽出して、それを整理していくというのか、事例検討のところなので何ページからになるのですかね。実際に事例をこういうふうに繰り返して検討していきましたという各取組のところは協議会の中で活用していって、課題整理として個別支援会議から残った課題をどう集約していくか、その場所はやはり協議会だと思いますので、これを協議会でどう活用していくかは後半のところをじっくり読んでいきたいなというイメージで見ていました。ページははっきり頭に数字が入っていないのですけれども、高齢の分野の方もぜひここは一緒にというものを資料編のところは共用という意味で。細かい数字とか文章、意見はまた後ほど説明できたらと思います。

○増田ＷＧ長　ありがとうございます。どうでしょう他。会議の中盤にもお話しましたけれど、例えば、大阪府はコース別の研修などもされてこられているのですけれども、確かにカリキュラムありきというところもあるのかもしれませんけれども、非常に今日の会議の中では使たらええで帳も含めてハンドブックで三部作なのかもしれませんが、こういったものをきちっと活用するということで、テキストとして活用するような研修というようなことというのは想定できるのですかね、それとも来年してほしいという意味ではありませんけれども。

今年度ですよね、コース別の研修で堺のほうにお越しいただいて支援をどんなふうにやっているかみたいな紹介も大事なことなのだろうなと思うのですけれども、さっきお話があったように、こういうような流れで、いわゆる相談支援だったら相談支援の方が悩みを一人抱えてしまわないようにするということでスタンダードな支援の背景といっても良いのかもしれないなと思うのです。地域の課題は地域で解決しようということで、たくさんの方に集まっていただこう、そこからがスタートだというようなことをヒント集なんかは記しているのかなとも思ったりもするので、このあたり何か思いつきのレベルでも全然かまわないのですけれども、どうでしょう、研修のテキストというか、これをどう使うかみたいなことに関して情報発信していくようなお考えなどはないものでしょうかね。

○事務局　具体にどんなふうにというのはまだ全然イメージできていないのですけれども、地域支援課とも連携しながら研修を一緒にできるものはしているので、別途相談しながら何かしらエッセンスなりは入れていくような形で考えていきたいとは思っています。

○増田ＷＧ長　ご無理を言っておるのは重々分かってはおるのですけれども、というのは、先ほどからの繰り返しになりますけれど、いくつかハンドブック、使たらええで帳、ヒント集という形で来たものをぜひ、これだけのクオリティーのものを得たというように私は感じておるのですけれども、これを上手く、せっかく出ていますので読んでください、一読ください。なんでしたら受付のところへ積んでありますのでご自由にお持ち帰りくださいだけで終わらせるのはあまりにも惜しいのではないかなと思った次第です。

どうでしょう、他何かあれば、地域の色々な課題なども。少し時間は早いのですけれども、事務局のほうにお返ししてもよろしければ。本当に色々な忌憚のないご意見をいただけたことはありがたく思っております。今日、活用の仕方もそうですし、もう少し見やすくするためにどうすればよいかというところの意見などもたくさん聞かせていただくことができました。最終、このあたり実際にこれがヒント集ですという形で今日はイメージ案なのですけれども、完成版が今年度末で一定の成果として完成させていくということですので、このあたりに関しては私もワーキング長として大阪府の方々と話を詰めながら作っていきたいなと思っておりますけれども、この点につきまして何か意見は、ないですかね。そのような形で進めていかせて頂いてもよろしいですか。

ありがとうございます。ぜひ、今日の議論の中だけではなくて、やっぱりこの点もというようなことがありましたら、どのようなことでも結構ですので、ぜひ事務局通じてご意見ご発信いただければなと思っております。

本当にここまでたどり着けましたのも、委員の皆様方の意見と私はワーキング長として感じておるのは本当に事務局のこの間のご努力の賜物ではないかなと思っております。事務局の皆様方ご苦労様でございました。

本日、このワーキングとしての議事につきましては終了とさせていただきまして、この後事務局に進行をお渡ししたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局　皆様お忙しい中、熱心なご議論と貴重なご意見を賜り、どうもありがとうございました。ワーキンググループ長預かりとなりましたご意見等に関して、また、調整をさせていただきまして、皆様のお手元にお届けできればと考えております。１回目のワーキンググループにてお伝えしましたように、こちらのワーキンググループは親部会であります高次脳機能障がい相談支援体制点検調整部会の付託を受けまして、このワーキンググループを設置している関係上部会へのご報告をもって正式なものとすることになっておりますので、部会に報告をするまでは案という取り扱いになりますのでよろしくお願いいたします。

それでは、平成２９年度第３回高次脳機能障がい相談支援体制連携調整部会高次脳機能障がい支援体制整備検討ワーキンググループを閉会させていただきます。本日は誠にありがとうございました。

以上